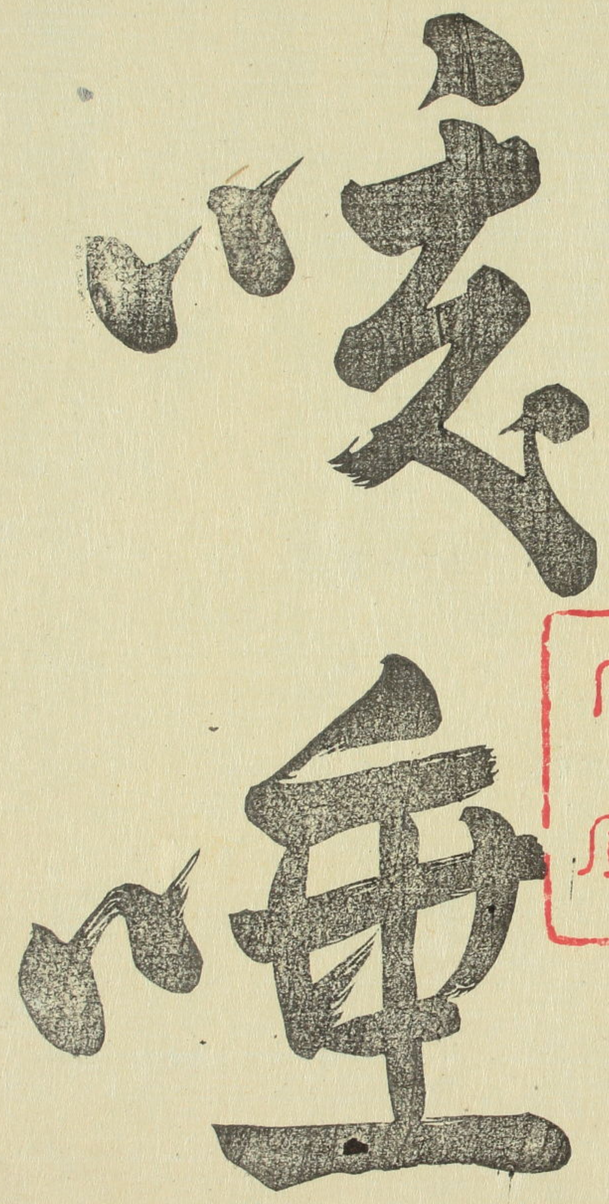
胡蝶の春

全



班山文庫
高野藩藩班山文庫

秋吉集

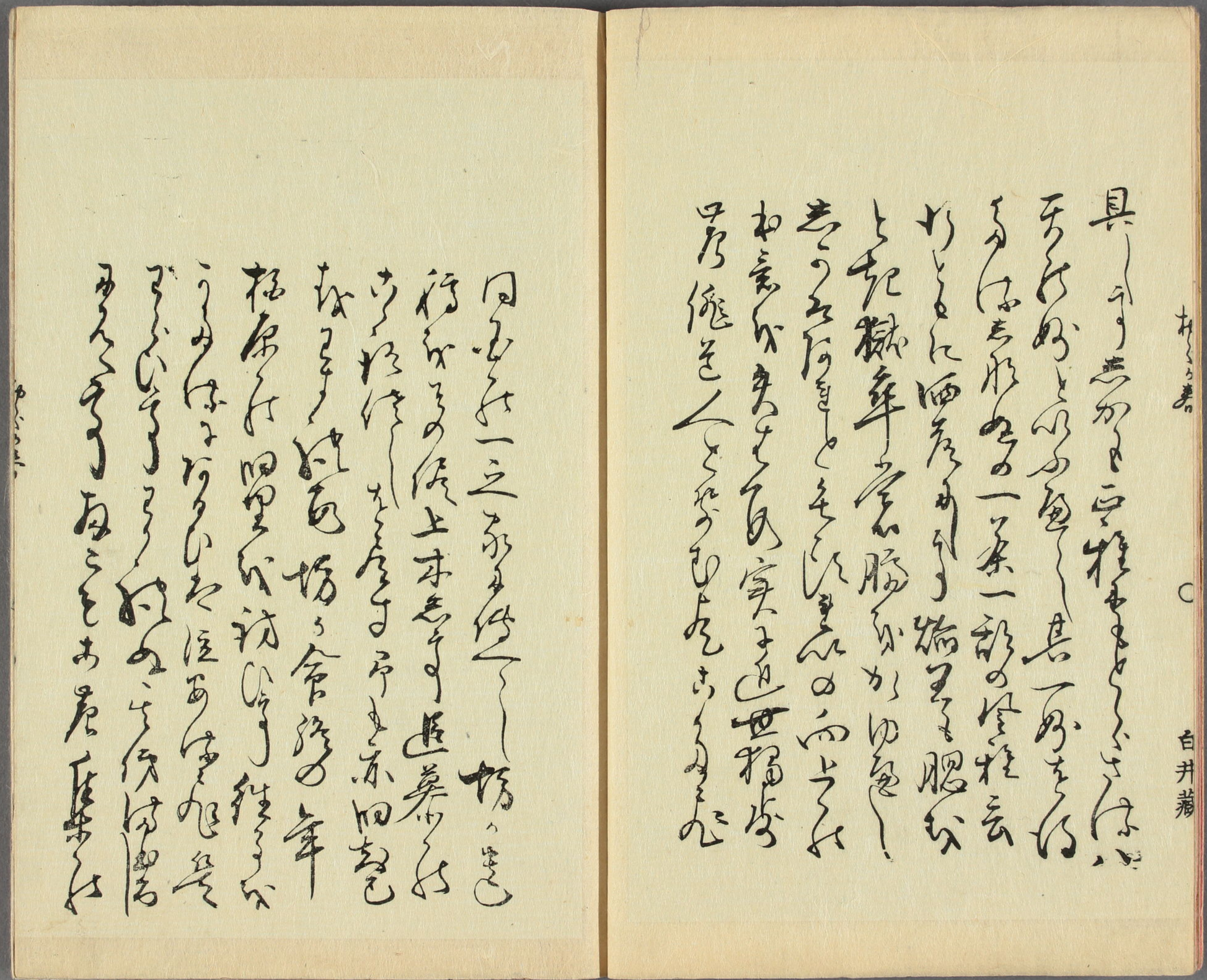
佗潛寺一茶翁著并圖

信陽 弓明菴藏梓

茅玉

是為白井一之老人所
藏小林一茶翁手書
〻掛幅等可愛玩者
若者鄭板橋手書其集

諸子ハ各〻菊之集ハ已
梓可謂板行ハ第一人
也書之還し
戊寅二月　蓼洲生



白井藏

今ハむかし嵐雲ハ夫婦喧嘩ハ平癒と云へ時
其角がもとにてしたく蕉園
もとゆ年　寒巣紙
清一年
酬和の
ものとりハ
ゆく
疎さしく焼よ
病も
蕾ふれ今
蕾中菴
蕉翁
自画賛
七年
八十三

昔ものこの玉菩提甲をとりて所々に浄土
を祈りて上人の姫は世を祝ひて
ぎぐめけハ新もせん迎大卅日の夜ひとりつゝ小法師
に紙書くしめ溶して翌の暁に表りくせよ
ときといひをくて本堂へとりに入ぬ
小法師元日の旦いまゝ偶ミいに関に初鳥の
声とおなくゞバと起て教への通り表門
をあけ〳〵と敲けハ内よりいつこゝと問人時
西方弥陀仏の使僧にしと答人

るよりはやく上人裸足にておん門の
廊を左右へさつと開て山伏原の上堅木枯
してきの人のふる事ばかりをやつくづく
ながめて讀ていとく哀世界ハ元苦充滿な
ひるを〻〻世間を素〻〻と　聖衆出もひ
しきまち八ひとつとなりておくと注ま
ちるとゝ此上人をつゝを抜くる懇ミな
をつゝなけきて初春の淨衣和絞てきる
洞をゑて祝人とゝも物を狂人なるゝ俗人

第二　無常を演ルを礼とゝもとゝ吟ずるを
佛門をおいてハいとひの骨張なる
身をれをきとゝもいさゝ替ておの里
ハ俗塵を切れて世流る境界なゝ
亭亀をきくへての祝辰も尼拂ひ
門口とめをゝ思ふ思ふ昆の
吟ずとゝ屋宮ハゝ金の竹を色ゝ
を門松立てす　煙ゝ雪の山流
乃曲り取りてゝ　の春も

なすに任せて形もなくなる

目おそきもちゝ位之ゝ春一盞

てぞの五月雨ゝ娘ゝ

一人おの〳〵の就煮膳を形〳〵

這〳〵笑〳〵言ふなるを作〳〵ハ

文政二年正月一日

男つゝもの壁ゝ

ものゝ所ゝ

忍ばれゝ水流る鳥ゝ都一茶

水江春色

すゝ男ゝも時や作ゝ春の月

出ゝ月花盛人ゝ

蓑光ゝ堂ゝ

庚猫の形〳〵ふ柳もゝ

さゝ〳〵と唄ゝ老ゝ

猫ゝとゝゝ端ゝ

初午

ゝの世ゝ世ゝの猫ゝ

かくもとゝ家や猶もすゑ〻二日灸
落〻ゆく胡蝶のもとゝ
上野遠望
白壁の雛をなつかすみ
菊代ハ麓のかさこもる
苔の陰ゆくの紅人ハなり
二月十五日
小うるさい花ゝ咲迎釈迦
三佛や寄て釈迦ものぞく
梅のもや釋ゆ出ていざもる
玉川
さゝ布まの足ゆ涼ハ

妙専寺門ゆこ民帰せり九迎ゆ十二ゆ
三月七日の天〻〻〻とかすめるふゆてゆハん
ゆ〻〻と如くとくせり き荒仏原を供して
荒井坂ゆ所ゆ芹蒔なつを
〻鶯ゆ鳴〻 鼠綿なゆの雪解水黒ゆ
立て動くとゆ赤ゆ
ゆ〻〻ゆ梅ゆ
ゆゆゆ歡てゆゆ
頭いつゆとゆて
ゆゆ哀声ゆ蛙のなゆ
此世の名ゆ
波ゆゆ込ゆ

やと村の人〻お厨にて炬をかゝげてをのちこち
捜りるに一里ばかり川下の岩にもたゝりて
呼りるなかに上にて人の数抱りるにも
一き被ぶり落の墓に思こゝろもるる
知んるつけてもいつものてゝいそ〻ゆりて
家内へこの三やけのなかにものなるんと思ひ
てゝ見れひ〻ひ〻山人も皆〻神をて
絞りるとみに雪にのせて初夜るるて
るにかき人をもあぬち毋ハ今やまそ〻と
みかゝりて一月ばかりとゝ人目も
耻す大声に泣てるひぬ日てる人に無
常なすもる境に思も其弟子ありてハきすら

思愛のきゝ丸に心のむすひ目をけぬハと
ちゝ〻り思るを笑ひの走りて川もりるを
夕るを物いを尿とめて〻ゝるる目もかて
らぬなりさ毎そ呼りる走るに九日聖遠忌
もにのもも椿の供に〻なりぬ

思ひきやかゝいそ〻ゆる弟子
聖四の〻なりてんとハ一茶

長〻の月日雪の下に老のひとる蒲公の
をゝひなをゝ春ハ〻の時を見て雪間
〻をゝ〻ゝけに首さ〻の色て世せの〻
入るやいなやかつとて切ゝ弟の力に

なり飛て鷹九法師の親のてゝかなの
毎年ぬけ草木国去悉皆成仏とゝ
も仏性[illegible]のみなり

独坐

かなしてゝまるまる蛙一茶
猫の子爪が盗ぬとゝまる月
松蝉の小隅ハ鳴てゝ鳴くゝ雀
大猫の尾尾てゝなる小蝶

三月十七日有り不詣

ゝもる竹とゝなる東陰も小閑帳
毎ぬけもゝと埴ゝ柳ゝ
帰後ゝてゝのつき弱

正月元日の夜乃丑刻より始りて八日目くゝ
天ゝ音響ゝるとゝ解ゝていつくゝの
人ゝを又吹ゝの法ゝてゝとけふす
ものもゝ其時東西南北をつと弘ぬ
ゝゝ思ゝ全くゝと信ゝ
又ひゝすゝなとゝさつけゝ天地ゝき
のなるゝさゝいるゝ耳ゝを塞ゝ
てゝの天乃てゝ
今此天下泰平ゝ
も後報ゝち俳優ゝ
ゝゝ此ゝ乃ハ其方の報の程ゝ

伏水を出て行くまゝとなりさと三月
十九日夕つかより誰うちと云て籠をつくる
ておの〳〵息ばらく〳〵ばらく夜ハ
ちら〳〵吹て窓の梅の木に一色を
今の世も鳥ハ囀ル経ぬ一茶
常の地をこ掃しかきもの
馬とともさこ泊ル春の夜
夜のなをこの山〳〵帰る
かすむ日やうん〳〵うん〳〵大せ
横ぬの雪のつくゝ〳〵雲
京崎を出る
入口のかいをなひく柳哉

春村ハ梅の木一茶
正月ハ夜ハ迎ぬの月
茶ぬむの一夜ゝ〳〵探哉
望〳〵と待て〳〵ちら探哉白雲
なをきれにぬ折し景の月一茶
卯月八日
長の日行なく間もなく誕生佛
五月雨も中休ミうよ今日ハ
病後
ちの月とゝ木ぬハ〳〵紙帳か
五月雨も仕ぬの月〳〵

小堅貝の天窓にかゝる扇の骨
竹のすとゝ思よく敷て花のす
入梅時や二軒茅ん手煙払ひ
谷茂橋
這ひくる橋の下より出てきす
もつ氏和尚とまくて寄るあり
人歌町
人歌を茶話をこゝをせゝ門涼
今とハ罰も所ゝ昼寝蚊
蚊うちゝ打ゝ見ゝ老ゝ世を
せゝよゝハもて添ゝ敷の蠅
和の花を一人きゝの社ゝ

幽栖

出ることゝ尺とゝ也ゝ此はら
方すすくゝ迎山家の
ちの里仕色てゝとてゝ田植笠の衣さハ
竹つを色の大竹行をえぬうち糸
花つむや扇ちよいとちんつる糸
とゝとゝとゝる隠蛙の車のそハ

戸隠山

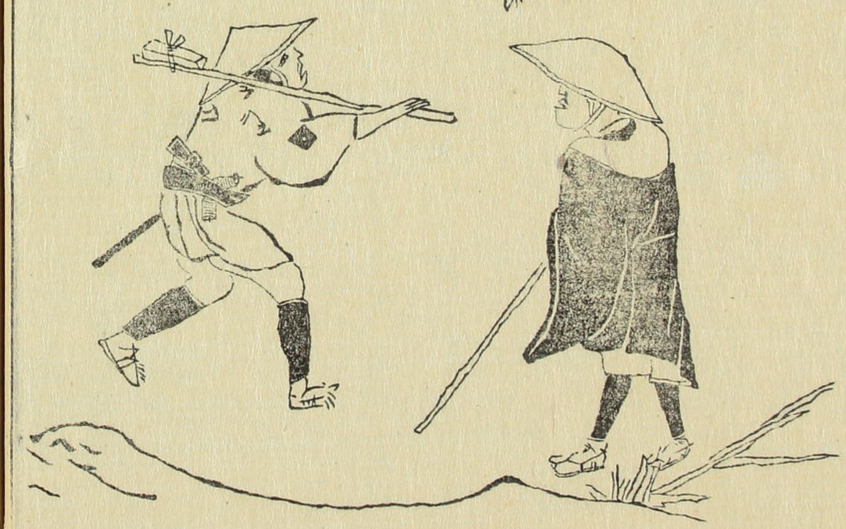
居ゝ居ゝ流ゝ流ゝ流ゝ水ゝ
此入りハとゝゝの滝を苔清水
ゝ蛙のゝゝつゝ老ゝゝゝゝ
哀門五天窓用心ゝゝもゝ

かくまで家の老て蓑笠打もたり
越后なる旅うけて商ひする哀さ
蓑笠やもてなしてなる頃なりいさ賣
筆よんのなくハ京嶺ん
世てさ休こ所や長水立
山苔も苔さ世話ハもちぶ
なるの天とりこケの月
独楽坊
高竹ん山ハ卯月吟る
伝の山や蛇もうき世何拾衣

似き法師
西行大姿
ハ
解ともこ
心ハ雪ト
の袖

天満宮ノ
ナカラ是を歌ノ
ヤウナレハ生ロ
ツケ又
白川の関を
越る月
一茶

ちりのくの方浪はいとゝ食盛首うけてふ
風居なせなら水賀ちをハ歌伝所ハ
西行しくんて球像なる心ハ雪と墨染の袖
と思ふくの梅晴のそらをつゝき去今更する
替へるもむつくく知る月十六日ゝ日久しく
蘇到るる菴知らわなりてこ星も
歩ひてる細枝知つくく思ふおのをすで
水六中の坂登つゝをハ一朝の月も西山
水かゝくく命ハ又なくんても白
川の関知るく越る月なれを十府の蓑菰の
十水ゝるもむかつうなゝと空づくる花ちらんど
心細くて家くの影の時を告ん老もとつてかゝせとよ



やくふの門へ畠くの餐ふ所のそよ吹くを誰をまつゆゑとなく笑へて行ひも忘れぬ海きさきと呼ぶ丈陰ふ情ふひて痩歴さそて詠る丈柏原八幡の山の外きのかゝる下ゆくゝなとおしてそうゝ生ゆくゝ花

思ふまゝ見えまとすきと示家ハ一　茶

かなゝ心を
古へふ花もゆくゝとぬむ足の
遠へ心ひそくかすみうゝ　仝
あまひゝ雨かとうきとを餐ふ
かとよきを陽の吹するゝ　仝

宋文公勸学文
勿謂今日不学而有来日
勿謂今年不学而有来年
日月逝矣歲不我延
嗚呼老矣是誰之愆

日々懈怠不惜寸陰

人の日も棒ゆく出よ習ふ又 一茶

無限欲有限命

此世を不足いふこと空蟬

起くの欲目引張る青田かな

心思ふ人をきにけり

古へ蝿とともに人をきにけり

直きせやかに花も蓮の茎

松陰や蛍一つの夜空哉

是童唄

三文掻く蛙ときまる長夜哉 希杖

行息に如く色入る蛍かな 一茶

夕息の花さく沖てうむぜる一茶

ついつい迷つくよ習ふ

大蛍

田中川原ゆき湯に昼涼して

なほ暑し今は山伏の笠ぬぎ

なむあみだ仏の方へ蛍哉

蛍よ蛍門すれすれ蓮と

かくれ隠れ蝿もかすれてくれ

ひいき蛙又ちかく方へ涼

松の螺とこと好て昼に飛

今とこ八哥も所ならず昼蟲

もなつき蛙の子のなく舟もなく

ひろ女魚測とる人の所に天下に生る
ひなる牡丹峡きたり 迎いひつきき
侍くて界隈ハ此こと国の人も足を
労しくひさしくたるものの明く
おかうきおのきもの人毋に立より
行りる人間なる花園を去つひ
雨覆ひの蔀なし今拭ひて
ひしく去り紅葉紫の赤の
遠なる野く開き拭ひ甚中に
黒と黄ある小いひ一に蕊を月をお
とるを夜ぬつ〳〵なるを心を去つ
ぬて〳〵ひ花のなる毋に人ぞ

くくて作れる紙の花を笹ぬきにして今宵望みの生をやめ乃側にむなしき屍に粧ひ立て美麗おきるを先てきくく色つやなく是こそ人のいきくを糸紙もて作りて赤かくれふくくつけて人を化すよりたちまちと腰うけ意むの價なむさかるをもなかるを生日くの厚紙を酒茶つひやして多くむこの心おもひ出きて老きふをくなり

紙屑もほうん色をよかくを糸一茶

蛙の聖送

ゑくの子ゝの獻糸蛙に生なくく
立糸埋めて訳いそくひきとの
お死なくふおんぢくもつくとくひ糸
くくとロ三ヶ月ヤて芋芋の左
を彼うつめくう上糸折かゞせ海めを
ゐる糸本草綱目車前艸の異名に蝦蟇
衣とくこ此糸の俗がいろつたとこ
糸和漢心をおなくすくこ
かくくりのぎくをとさくいをなる糸

卯の花おろくく蟇の塚一茶

此もの諸越の仙人、忽ち自在の術をなし、氣宇天王寺の大士、ひゑ山き武名を誇りしき、昔、の事を今此治世に市、ゆに隨ひ、和きて喜の文学せ、ゝ技を廣げて、極よ、と好奇をやつて隅の蔭のさ、這ひて人と問ふ、原むに甚つ、魂ひ一句いひ出合ゑ、の判者、長崎の生涯のかまたなり、

蛙一茶

蛙ん、山ひえる蛙一茶
蛙ん、ゆ、ゆ、引蟾 長角

電

思ひをたゞつてみるゝ蟾曲翠
一雫天空なるゝ引くゝ一茶

そんそうよてこそと青田のひいきか
閑の蚊のぬんとゝゝ焼きけり
蚊の声ふとゝゝ上ふてゝゝ
寄せんてゝ遠々立の評茶か
茶屋中詩家なる紙帳哉
山寺の父哉ゝ初ゝ庭水哉
蓮の花ふ此世の家八曲りけり
狗ミ哀ゝ鳴ゝ蟬の声

ゝゝゝ日なと源ゝ

廿八日

去なの〳〵玉墨坂と云所ふ中村行りと
又医師ゝ〳〵ゝ長文の口さくを毛ふ蛇の
つるみゝゝ行粉ゝゝゝゝ長夜かゝを
所の物づきゝゝ痛ミ毛ゝゝつひゝきを
ゝゝゝゝとおちてゝ死ゝゝゝ長子秋
の業ふつきてゝ三昔ゝゝ房毛を
ぬゝゝ毛ゝゝ才ゝき松茸のゝゝなるもの
ちちゝゝゝゝ去ゝふゝる与妻ふ逢てゝ姫て
交りせんゝゝゝ叫ゝ棒ふゝゝゝなる
もの毛ゝちめゝゝゝと小さゝ所ふ毛ゝ
ぬハゝゝゝゝ今ゝゝふ物つと用を
ぬもゝゝ恥ゝくもゝくいまゝゝ

婦人なる替ものゝ又車ゆくんと百人を
うもとり替へ引ぬき妻ゆくえぬきとるを
くおのの恐なるもを狂氣のをくを
いくちこいくちてくゆ八独身をくゆ
ゆくるうち拾遺和語是ゆ昔双紙なと
ゆをくくと思ひ作くる和今目のゆを
くんくとを見るの蛇の執念ゆ是家血節
をやすなくんくしくひをゆゆ嘆をくく
をくををとゆ活るもの蛍風ゆいくくと命ゆき
人ゆゆゆんまゆをくつるみ皆る和殺す八罪
殺きゆをなる

魚ともゆ桶ともをくを門漁ニ一茶
くかすめくくかすめ敬ちる

彼岸の蚊釈迦のまゝ喰ふ　大江丸

水鳥のくちきてひるぬるもせや鯉の
命まつるもせそ　ふの世や　光俊

ぬりけしかとわらひ下ふるむもくの
ふかさ知きゝ方知いるせそ　俊教

陰向山

登良やかつかと燃る石てろく一茶

俳諧宗匠を水に送る

鬼茨も除てゝろよ〳〵一茶

古之為関也將以禦暴今之為関也將以暴

関やりの魚点をやる梅の茶一茶

人声よりもつ蛍甚くハくるめとひぬるや

蓮の茶の曲るもうき世哉

隈畏のなそ竹や木下闇　大沢

芹の高くもんのもの　越後

柿喰へば鐘の聞こゆる法隆寺

江戸住居

まて見ても蓮くさかりけり山涼

なくて水二文の水かけ茶

小金原

田一面蛙なき立て水かけ

ひらかれもつて芋とりの人

殺病神蚤も屁をこき流り

蓮林寺

蝶々のぬけとんと茶釜

横と悪く云もする蔦蛙

蛙の尾をまつ時よりてきた

白井藩

白井郡古川郷古ハの里山の神の森と

要こゝ拾ひまゝ庭の小隅に埋め

ちゝ木つゝ芽をもつて蛙けな

らを東隣て家に家和作り足

ぬるゝ水田の恵とし子而露の

潤ひとゝ色ハ甚と色もゝ一尺

もゝ伸ひ老ゝを四囲のなゝ

ゝ冬の色東より西より南より小ゝ家

の大雪和ひゝ和ゝ小ゝ

拾も越の老ゝ山一夜に元と開ゝ

木ひゝゝ甚山に薪水をもつて

愛宕山の石槽登ゝ漸三月ゝ

初なる色て長閑なる陰〳〵の脊戸畠ハ草
木まてこゝろもとけて咲る上
彼山ハいまゝ白妙ホ風冴へて巖
寒を敷くけしきてしも卯月八日髪
きけ出の歌を風ホ張るて山学のあ
ちゝ良ホ雪ハ消へはてるホ哀
なる郭栗の木ハ根際ちかきとと
折〳〵仕色ぬ人なりを直ホ無常のゆ
と立昇る煙ホ根ちをつ〳〵
青空吹てかゝる一尺ちゝ伸る松
又前のゝ家の雪を踏込きてかきと
おき〳〵て七年の

星霜を累ぬゆとて花咲き寒入るちゝ形く
こゝ色と此世の縁花ちきを拙も果すて
生涯一尺花ちゝ咲ちゝ
郭又さのゝ
茨の蓬を〳〵ホ地ちをめゝもて鬼を
山の山ちゝ〳〵ホ咲あゝて晴き
世界に芽を出す日ハ一日も
五十七年前の玉の緒の今ホ坊ちるも好き
こゝちるホおのれ不運ホ科ハ
ホ及すちゝ不便しゝ
なゝこはなちをのの日陰ホ一茶
ちゝ色と因縁なゝんと思へちゝ

生とらめらめ

ねる夕水霞(オビ)ゆ目の上の
幸夷も花の咲てこりゝ一茶

甚弓

なちゝの蒲団に苔の錦綿 山崎宗鑑
竹の雪ちゝ八月のまてる 正勝
うゝきまして子の息の蝿ハん 紅雪
なけ、迷惑さん高さ夕暮てる 未達

貞享四丁卯年仙

菖の縄目知ゆるさ
まゝなちる嫁の花をけて 芭蕉

祇園拾遺

下部ひそゝ昔 紀ゆゝる

おく山宗仙 続世乃又にもしる夜の色 未達
山木四ゝ生て弟子血をぬる 芭蕉
ふさき去猫のゝ名知て世を傾ゝ 凡流
さゝ乃ちを学の涙知きて京服のゝ去せてゝ
学よなとさハなきそちわたり き貫て娘
小猫四印き世知 き

親のなゝなハとても知ゆる仇を咥て門不立
とゝよゝゝ唄ちゝも心細く大ゝの人交ゝ也せ
すゝゝゝの畠に木萱なと積ゝる 斤僕
ホ蹋りて 長の日知ゝ知ゝ永ゝなゝも
袁とりゝ

永とまて延て知親のない雀 古戈 弥太郎

昔夫和泉国立田村にむくつけき女有けりまゝ子
の咽を十日程ほしてより飯を一椀そせひら
かして以て是知所の石地蔵の首を
とらんまでに汝にとらせんといふに其子は
ひだるさ堪がたくて石仏の袖にすがりて
しかじか願ひけるに不思議や石仏大口
明てむしやむしや喰ひの上にさすがのまゝ母の角も
折れて夫より継うめる子と
隔てなくそだてくるとなん長き
藪のきち今になりておかしくの供物せさく
なりけり

ぼた餅や藪の仏も春の風　一茶

こその夏竹植る日のころうき節茂き
うき世に生れたる娘おろかにしてものにさと
かれ迚名をさとゝよぶことし誕生日祝ふころ
ほひよりてうちてうちあはゝ天窓てんてんかぶり
かぶりふりながらおなじ子どもの風車
といふものをもてるをしきりにほしがりてむづかれ
ばとみにとらせけるをやがてむしやむしやしや
ぶつて捨て露程の執念なく直に外の物
に心うつりてそこらにある茶碗を打破りて
それも直ちに倦て障子のうす紙をめりめり
むしるによくしたよくしたとほむれば誠と

思ひきやらんと笑ひてひさむりをむりぬ心のうち一点の塵も残りなく名月のきよらかに清くくもりなき俳優をうるをりをり心の波を伸しぬ又人のまうてうんうんハどこもといへども犬を指ーかかくハと問へども答をゆびさすまゝ口もとより仏先とをもて教てかきてくのひらくいたで春の初音の胡蝶の鼎をもてなさんとなん芝へ行る此おきゝ佛のもとひらん迫夜の夕ぐれを持佛堂に蠟燭をともして鈴かなうもどこを居てもいそがはく這よりてさるびのちいさきふを合せてなんむく

と唱へ声老たらしく中なくなるまで財務くそをもつけてとおのもやうらうもいくくの哀れいくき額うるを老いく波の寄せ来る齢を弥陀をものむすをも老くてうるうる月日を費やすてそこのこのふかもつくをと思へも哀世を退けたる世間の程を蒔て孫よもうるる蠅をもるみ猫を巡る蚊をそらして刺仏のいまゝ酒を呑むれ。是ヨリ元ニハケヲ追ハ見ノ考月をいと涼しくかの鳴の踊の声のすもをもそ生くちに小椀投於て斤いくをいくを出てくを色をもけるを仰くてうれけなるを入てつけていつう

かゝる折から宮殿の中なる
へんてんとして廿五丈の管絃もたゆる
ことなくて無なるはさならんと和方をつゆ
発を忘れてうさ知なんもいかく
日すゝをしらの角のつゝの石もゆ足れ
うてやさまとゝ入てる
あゝ嬉しの八日のくけるとゝ眠る甚うちうち
世ハ正月と思ひ殿禁そゝ掃かつけて
園扇ひゝく行をさ月と園ゑ注意のする
目の光る相景とさゝめかしく抱き起て
ゝの自ゑ尿やゝて乳房のゝそすハく
吸ひなゝむな板のゝ行きて

ゑこく笑ひ歌を作る ゑ母ハ長く 胎内
のゝひも日く 襁褓の編 きも
かとく忘れて衣のゝの玉を
ほゝゑなて きゝて一八ゝゝ
あゝ
蛍の逃かゝゝ ゑ原乳が一茶
ゝく思ひ寄せる小児を 抱ひ連ゑ
と言ゑ集め
柳ゝゝん ゝゝ
茗菜ゑなん むくといゝ
ゝ岡へ行くもむすゝ更衣 、
小児のいまゝ祝ゝ

[illegible]のゆ[illegible]てんつるてんの初給
各月如[illegible]てくるをりとなるあ
る宝[illegible]をやうく笑上搗やゆ
のてう餅〳〵とそ蒸へ[illegible]
妹[illegible]の脊負[illegible]歌りや配餅
餅屋の赤張[illegible]ちゆ[illegible]
染屋の吹くゆへ結る[illegible]
ひんをくや紙[illegible]をなる上蓋

去来

[illegible]ひ[illegible]ゆ負徳
[illegible]ゆくとやひ[illegible]を芭蕉
[illegible]の草履る歌心る堂

花といへもてはいさいるや　羅香
春雨や格子もすき童の　東麦
見てゆやるのなる方へ植て　葉培
おとゝもるの木のるのせうれ　是角

[illegible]ゆ初日

[illegible]の歌をす上時ゆ　仝

田[illegible]の歌のもとゝ[illegible]
ちの〳〵るの初節句　[illegible]も貧少人目[illegible]
[illegible]を夜さんる[illegible]
るれ思人貧[illegible]ゆて義之猫きゆ[illegible]の
心[illegible]ゆ[illegible]心をゆ[illegible]
る鬼男なるとも[illegible]ゆ[illegible]

ゆくゑひ[illegible]ひ[illegible]を[illegible]ゆめや

所有畜類是世々親族とめん親

を[illegible]ひを慈む情行を[illegible]

あらんをも

人の祝の為追ひ花の子　兜買

[illegible]　丸明

頁てあてをふる[illegible]　東陽

鹿の祝笹ひく[illegible]

か[illegible]ハ子のない鹿ぞ

子[illegible]の[illegible]

楽に極て悪ひ死るハうき世のなごりなりけ

[illegible]ひとまなりさる牛状の小松の二本

[illegible]の供ひ盆なる縁子加茂耳ケ水の

[illegible]き疱の神ケ迎を

今水濃のきなら[illegible]

泥雨ケ去[illegible]側ケ[illegible]月さくる

[illegible]ケ[illegible]是も三日経[illegible]ハ疱ハかせくち

ケて雪解の峡ケのかろ[illegible]落る[illegible]ケ瘡蓋

と[illegible]ケ[illegible]を祝ひ[illegible]袁法師と[illegible]

作り笹場浴せる[illegible]神ハ[illegible]

益[illegible]ハ[illegible]すく[illegible]ケ六月

廿一日の菊の花と共ケ此世切ケを[illegible]母ハ死

良太すまうくとなく泣もむなしかるべし
この朝に落んとハ山水のゆくへひゆかす都
花の梢にもとゝめぬくひとなくゆきうめ良
しくも思ひ切やうきハ恩愛のきつれく
なり　雨降の世ハ高の世なりきなりし一樂
会四月十七日みものくにゆくとんと暮さとと
歩るる歩さをるてます　なりて止をめるもかるか幸
あるん迚を祇神のとめ生なりん

君引
子ふかくきてるる
紙と良もかてをおてるん一　踊　落梧
世ふかくきてるるの家さふ

八ちゝ郎子ひとり餞乙郎の送　右ふ
娘ふ葬りかる夜
夜の落出ミ蒲園ゝ望ます　其角
孫娘ふかくとて三月三日野外ふ楽
宿ふかて　雛忘れ桃の花　猿蛙
娘ふきるふ
中六夜ハ赤ふ月ふ月の夜　秋風
桃ふなるて世ゝ都ふ
春の月ノ気の遠をあるらい　仝
子ふかるしなひて

蜻蛉釣りしハとてとゝ好とすりかゝ千代
なんてゝ[illegible]人くの歌も心を傳人[illegible]
と考る〜作りめ

[illegible]人考る

哀し夜中よ[illegible]
世を[illegible]の泣ハ
[illegible]

為家

[illegible]
世を[illegible]

兼輔

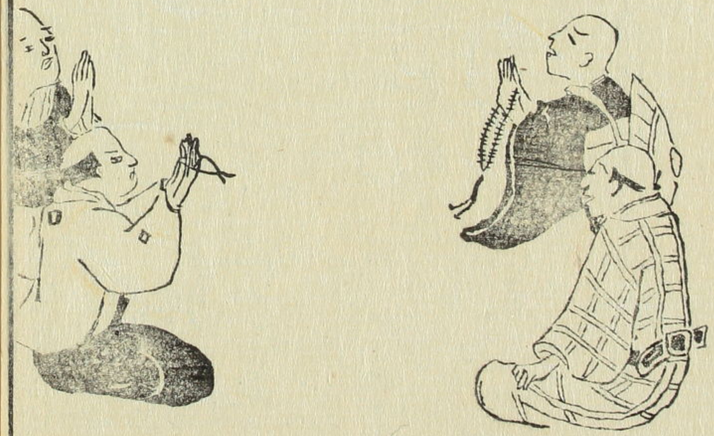
人の[illegible]の[illegible]
[illegible]男[illegible]

蓮とハ碁ノ言ハ
一手〜ト[illegible]

頌曰

未舉歩時先已到　未動舌時先說了
直饒著〜在機先　更須知省尚上竅

貴人[illegible]扇[illegible]一茶
御川[illegible]鹿の秋
大[illegible]扇て[illegible]　小僧の名
曲者隠[illegible]
[illegible]蛙のついと古井に忍ひ[illegible]
大山詣
四立向の求を力[illegible]裕[illegible]
を[illegible]冠者[illegible]扇[illegible]



紫乃屋迯きかくしたる門ハ炭屋根裏
なる思き巣鳥をとりて籠伏せたる
なるハ長夜歌をうたひ夜まゝ長襦袢の上ハ
唱なる長さハ

なるほど人間ハ人間ハ
声を惜の唱あるまじん　一茶

盗人おのゝ古ハ隠をて紛れ
業の手罠を巡るハ唱
市的り場ハ人ハ多くもの餌苔を考へ
不使さ

人眠き夜ハ
節の下ハ世の気を呑む鹿ハ　立志

さすのさつ男も袴切りしハかゝるふなんの所なる
ハの色なきて八ハく信濃黒姫山のきゝく
下りの小隅なきハ雪ハ長きゝ霜ハ秋
なる物ゝ梢の叫ゝもとゝあるのなゝ
百木千草ゝゝ色々ゝ
く変ゝ〳〵さゝハなゝ〳〵〳〵 梅ゝ木をく

九輪草四月ゝ草て仕色ゝ一茶

張西八郎為朝人碑ゝつ所ゝ

時ゝ蝿虫ゝゝもゝく
鹿のゝや横ゝゝゝ人 蕨の芽

老翁岩ゝ腰ゝて一軸をゝつゝ景ゝ
ゝ汝ゝ行をゝ久〳〵ゝゝきゝ

史記李廣傳贊桃李不言下自成蹊

幽栖

永家ゝ恰好ゝの冬ゝ一茶
ニ三遍人をきよゝつて蛍
花蛍長ゝハくハぬくハぬとや

成蹊ゝこゝの色をつひゝ不言人とゝ
ゝゝ学笠のゝ色ゝ此ゝゝゝおゝせ
ゝゝを

つの玉の何ゝも松木立
白笠ゝゝゝゝさゝすゝ木下陰
ゝゝゝゝゝハ此蕗の蘿ゝゝ
玉を吐くにつゝゝゝゝ引蘿
赤いゝの栗ゝゝ栗ゝ見ゝ立

稲妻や一切ゝに世か直る　一茶
石川はくはらり稲妻さらりかな
夕貌や子の笑し椽の穴
秋風にふいと出る蛍かな

二畳休

乳呑子の風よけに立かゝしかな

連にもくれて

一人通ると壁に書く秋の暮

七月七日墓詣

一念仏申たけしく芒かな
木啄のやめて聞かよ夕木魚
木つゝき目利して廻る庵かな

経堂

虫乃屁を指して笑ひ仏かな
ほろほろと片足立や小田の鷺
山寺や椽の上なる鹿の声
下手笛によつてきけとやしか(鹿)の声
草花のかくれても見る蕗かな

さと女卅五日墓

秋風やむしりたかりし赤い花
さく程の寝ころなり萩の花
茶の木にもよう霜よけの菊の花
のうのう極楽の夜露かな
露の玉つまんで見たる童かな

立ちよる八木の下迄大家まで貧しき者
の腰をかけぬてをかなくなるとたちよる
なん家の新方をこと大きさ牛をかくす
型の古木ゆりてくらちそくらる所ハ菓子
もゆりまくらる所ハ長下を申きする人
月くとりゆりまくハなくりゆり

十五夜八幡井野梨本氏にゆりて
古くの為に一人月見一茶
月蝕皆既 戌七刻左方ゆり欽子大刻甚ノ丑ノ五刻左終
人数八月より出へ欽ゆり
人の世ハ月もなれもなくゆり
、

潛上、月の欲る如目利哉、

酒屋を志んの咄つゝ月哉

おの〻漬噌のそそ嗅を考ふ

碧麥の芒の如切て月哉

九月十六日正瓜院菊會

秋さらば神農食や菊の茶

菊屋や屋敷〻〻のか盃

枝先〻〻画解するしきくの茶

入屋の大祇笠てきくの花

下戸菊ゝ立しろ丸菊の茶

きと女笑皇

夏去るまゝ和

歌屋さ去のてなるゝ玉屋一茶

どゝ遅きてゝ人里和泉名

山吉の輪形ゝゝゝゝ

野の色せんそ岐きゝゝ玉

蟬蛉や五分の魂見えと

二ゝ井野の高ゝ去ゝ

秋屋や礫石ゝ吹てる古ゝ山

ゝゝ竹を松去行ゝゝ夜破

ゝ去屋ゝとつゝも秋の茶

美僧の扇面に

[illegible]恥る夜寒の[illegible]一　茶

[illegible]村なんとの[illegible]白飛

蔵陰やもとの酒屋の[illegible]西　土芽

老樂

[illegible]を[illegible]一　茶

蜂のとやの唐箕　のかたち

小菊なる縄目の恥ハなる

戸[illegible]

小使所　交と[illegible]夜寒

[illegible]恥[illegible]

[illegible]

猿ハ蓑[illegible]一　茶

[illegible]塗　[illegible]

[illegible]

炭の史[illegible]の[illegible]

三[illegible]設く[illegible]

[illegible]

善光寺門前憐[illegible]

[illegible]

大根[illegible]　柏[illegible]

[illegible]雪の[illegible]

[illegible]

草鼠加西てくるる十夜の一茶
雪ちるやなくけもいへぬ老なの花
能なしハ罪もなくなくなを籠

強盗をて
りくをと

張ぶ蕎麦と
彼見とくて夜のそれ
お袋ハお祖父ちきる指南ル
餅搗ハ隣ハ来とくてるル

餅花

かまけるル柳の枝ちちなる
るのそるるを飛もまるし節きひ

東ふちくんとくて中途
とちくる朱

掠手とくこ吸ふ宝ふル一茶
護持院原
ちくくハ廿四文の亀ふを
両国橋

寒垢離こちくちの竜の枝ル
かもいをくくとちくひし
くくくる朱ひと京籠り
くくハ朱ハ下りて老ち髪
つちくハ朱ハ名刹の北ふ交る
もつくハ朱ハ江戸のくく

長追ハするなよの声や鬼やらひ　一茶

小人閑居為不善

冬籠り悪く物喰を習ひけり　〻

廿一日節分

一声に此世の鬼ハ無りけり　〻

けふからハ正月分ぞ豆の音　〻

札納

梅の木や此一筋を願なりけり　〻

廿七日晴

嫁やうなるとく起て飯ぞ焚けるわらく東隣の園ならんと上者の餅搗なりけり例之無く来るとて次ではいかゞなる人

かゝる滞りての立ちたち賞翫せよとしみゝに今やくと待にまちて飯ハ氷りのことくにひえて餅ハつひに来ずなりぬ

我門へ来さうにしたり配餅　一茶

他力信心〳〵と一向に他力にちからを入て頼ミ込ミ候輩ハつひに他力縄に縛れて自力地獄の炎の中へぼたんとおち入候其次にかゝるきたなき土凡夫をうつくしき黄金の膚になしくだされと阿弥陀仏におし誂へに誂へばなしにしておいてはや五体ハ仏染ミ成りたるやうに悪るすましなるも

自力の張本人なるべく問ていはくいかなる経
文に心得たるぞと申流義を叶ひ付て和人
答ていはく別に文ふむ事なし細に存ぜず
扨て自力他力何のかの文章もなきなり
とたゞ神流てきて居たる一大事
に是対面の申前に按ずして地獄なり
ともいはなる孫の申ちがひ
次第のそなたなるべきと申教の中
なるべし其故定しての上なるべなる
る仏とは口の下に欲の網なるの
野に長蛇の如ひして人の目に蓋め
世後の序のかくそめに水を引

親鸞上人
傳云地獄
極樂ヨリ
きたり只一念ノ
ヒカリクケシ

く盗ミ心にあめく持参る者を時に
なるべ作て壱仏中に不及称
もすべも仏に見則當流
の安心とて中し定めて

かくも為なる任せの一筆一茶

五十七歳

文政三年十二月廿九日

此一句や志なの作法書
一条殿より草行
風調晩〻蕉こと杜を写す
十八や寸毫を晩蕉よりの
志ゆゑ佛雛祖室を

うゝひさゝ法師のよめる

白雲を一体白隱を拭し

ちゝなる千ゝ

千四郎

細を花たゝ翁の

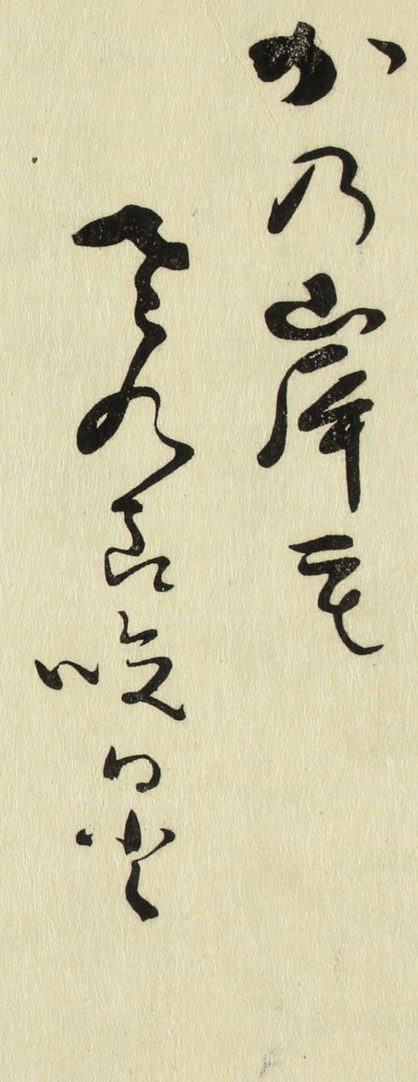
為て世蘆成

一國に人情はさまゝ

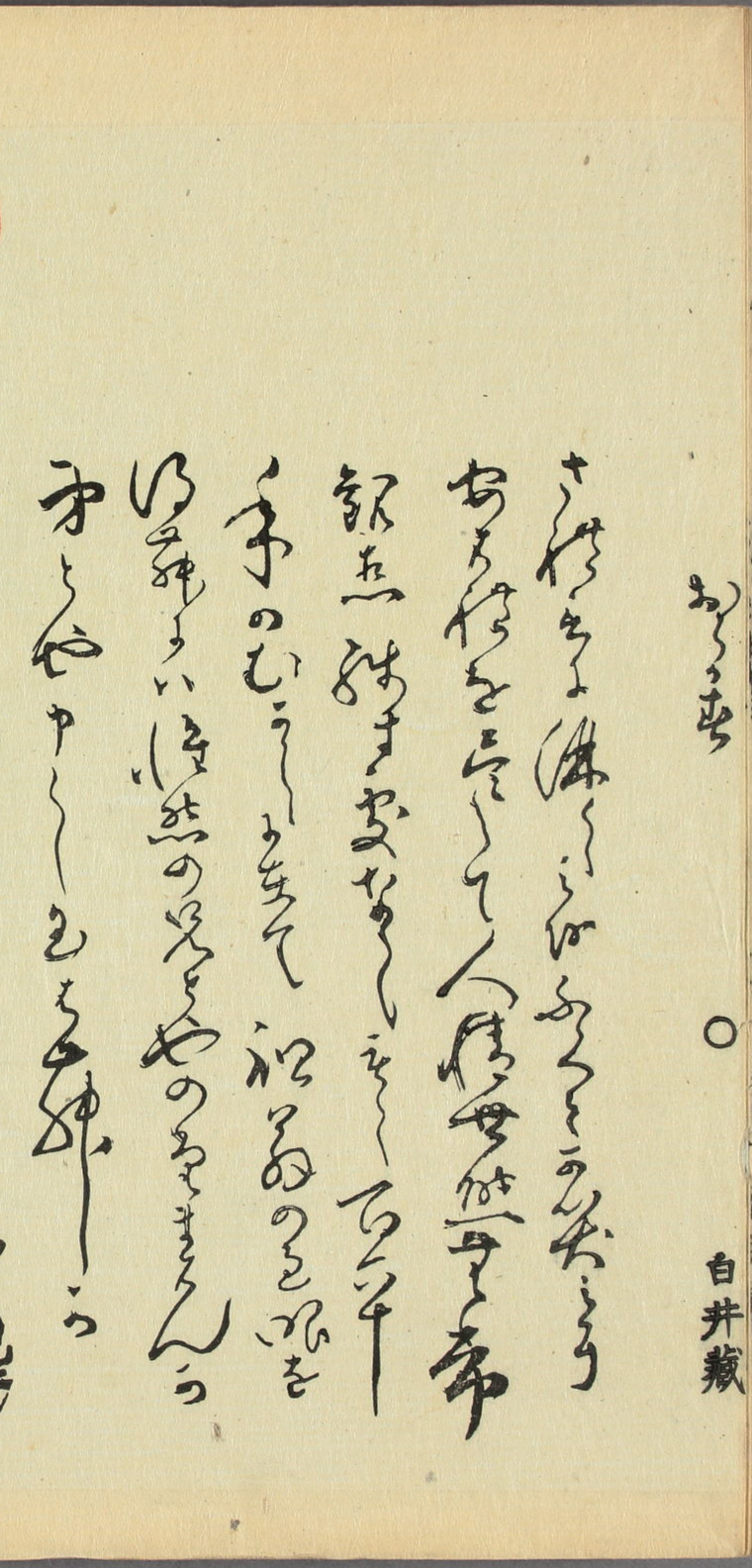
東京氏郎くのとゝもに

素永四年の夏彼岸

伊日 高雲



白井藏



明治十年第十一月御届
明治十一年第六月出板

長野縣平民
出板人 白井竞兵衛
俳名 有明菴一之

定價金貳拾錢

發賣書林

賣捌所

中巷第十三番地 有明菴一之
第拾九大區五小區高井郡

長野町八百十五番地 西澤太郎
第二十三大區三小區水内郡

柏原村七十三番地 中村利貞
第二十六大區六小區水内郡

中巷町三百八十二番地 山岸清左エ門
第十九大區五小區高井郡

中巷町三十三番地 白井亮
第十九大區五小區高井郡